

彙 報

会長 川 本 茂 雄

昭和 57 年度第 2 回常任委員会

日 時：9 月 5 日（日）午後 2 時～5 時

場 所：早稲田大学大隈会館 2 階 3 号室

出席者：川本茂雄（会長）、日下部文夫、柴田 武、田村すゝ子、蛭沼寿雄

欠席者：池上嘉彦、岸本通夫、関本 至（以上委任状あり）、宮岡伯人（委任状なし）

議事ならびに報告：

- （1） 第85回大会のプログラムを決定し、案内状作成の準備をした。
- （2） 第85回大会より、開催校への大会準備金を従来の10万円から12万円とすることにした。
- （3） 第86回大会（昭和58年春）を一橋大学で開催することを企画した。
- （4） 事務局から57年度会計の中間報告があった。
- （5） 今年度の第1回委員会で設置することの決まった制度検討委員会について、その具体案を討議した。
- （6） 次期会長等選挙の日程について。10月中に会費納入に関する通知をした上で、11月末日の会費納入状況に基づいた名簿を作成し、会長・委員・会計監査委員については12月中に投票用紙発送、1月下旬開票、常任委員の半数と編集委員長については前記選挙結果が確定後ただちに投票用紙発送、3月上旬に開票という日程で行うことが提案された。また、昨年度に認めた例外は今年度は適用せず、会則どおり57年度の会費を全額納入した者のみが選挙権・被選挙権を持つことを確認した。
- （7） 昭和58年度九学会連合研究分担者の推薦について討議した。

昭和 57 年度第 2 回委員会

日 時：10月16日（土）午前10時～午後1時

場 所：大阪樟蔭女子大学会議室

出席者：川本茂雄（会長）、井上史雄、岩本 忠、大東百合子、日下部文夫、国広哲弥、小泉 保、近藤達夫、佐藤 茂、柴田 武、清水克正、下宮忠雄、庄垣内正弘、杉藤美代子、鈴木孝夫、関本 至、竹内和夫、平山輝男、蛭沼寿雄、堀井令以知、前田富祺、矢島文夫、藪 司郎、山口 巖、湯川恭敏、吉田金彦、吉町義雄（以上 27 名）

オブザーバー：服部四郎（副会長）、井上和子（ICU）（会計監査委員）

欠席者（委任状あり）：池上二良、池上禎造、池上嘉彦、石綿敏雄、井出祥子、井本英一、上野善道、大江三郎、奥津敬一郎、長田夏樹、加藤正信、北嶋静江、岸本通夫、北村 甫、金田一春彦、阪倉篤義、田中克彦、田村すゞ子、寺村秀夫、長嶋善郎、西 義郎、野村正良、野元菊雄、橋内 武、林 栄一、早田輝洋、原 誠、藤本幸夫、松田徳一郎、松浪 有、松本克己、三根谷徹、三宅 鴻、宮島達夫、村山七郎、山末一夫、吉川 守（以上 37 名）

欠席者（委任状なし）：大江孝男、鬼 春人、亀井 孝、崎山 理、塚本 勲、長谷川欣佑、安本美典（以上 7 名）

議事ならびに報告：

- （1） 第 2 回常任委員会についての報告。
- （2） 昭和57年度会計の中間報告を行ない、これが了承された。
- （3） 第86回大会（昭和58年春）を6月11日（土）、12日（日）の両日、一橋大学（運営委員長田中克彦氏）で開催することを提案し、これが承認された。
- （4） 選挙日程について提案し、これが承認された。また、57年度の会費を全額納入した者のみが選挙権・被選挙権を持つということについても了承された（常任委員会議事録6参照）。
- （5） 制度検討委員会について。検討の対象範囲を会長の任期と選出方法、常任委員会のあり方ということにしぼることを提案し、承認された。なお、検討委員会の構成メンバーの選出などは次回委員会以後に行なうこととなった。

- (6) 昭和58年度九学会連合研究分担者（共同研究課題：日本の沿岸文化）として、江端義夫、佐藤亮一の両氏を推薦したことを報告し、これが了承された。
- (7) 文部省科学研究費補助金の配分審査委員の選挙。日本学術会議よりの依頼にもとづき上記の選挙を行なった結果、次の各氏を推薦候補とすることになった。
- 第一段委員 小泉 保、國広哲弥、大東百合子（大東百合子氏と堀井令以知氏とが同数得票で、選挙細則C1により抽選の結果、大東氏が当選となった。）
- 第二段委員 柴田 武、日下部文夫（日下部文夫氏と堀井令以知氏とが同数得票で、抽選の結果、日下部氏が当選となった。）
- (8) 第13回国際言語学者会議についての同会議会長服部四郎氏より学会宛ての礼状を朗読した。
- (9) 堀井令以知氏（編集委員長）より『言語研究』の編集の進行状況の報告があった。
- (10) 新村出賞についての紹介があった。

第 85 回大会

期 日 昭和57年10月16日（土）- 17日（日）

会 場 大阪樟蔭女子大学

第 1 日（10月16日）

開 会 の 辞

公 開 講 演（午後2時より）

「韻律的特徴における音響学的側面と言語学的側面との関連」 藤崎博也

「ザ行音・ダ行音・ラ行音の混同

——生成および知覚の実態と史的背景——」

杉藤美代子

会 員 懇 親 会（午後5時30分より）

第 2 日（10月17日）

研 究 発 表（午前9時30分～12時）

○A 会 場

- (A1) “hata, hadi, mpaka” と「まで、でも、も」
 ——スワヒリ語・日本語語彙比較の試み—— 江村裕文
- (A2) フィンランド語の名詞形態論 松村一登
- (A3) 言語接触によって生じる文法的特異性の分析
 ——スペイン語アンデス方言の場合—— 細川弘明
- (A4) 英語の〔i〕と〔I〕における音響的特徴
 ——英米人と日本人の場合—— 中路信子
- (A5) 法助動詞の意味的類似性の構造に関する一実験的研究 藪内 稔

○ B 会 場

- (B1) ユーラシア比較言語学の試み IV
 ——ツルとカラスの語源学—— 新谷光二
- (B2) 願望・詠えの終助詞と人称語尾の痕跡 藤原 明
 ——日本・ドラヴィダ比較言語学からのアプローチ——
- (B3) 日本語の系統問題とドラヴィダ語の位置 芝 丞
- (B4) モンテギュー文法と再帰化 杉本孝司
- (B5) 英語における死の婉曲表現 木下栄造

臨時会員総会（午後1時10分～1時30分）

研 究 発 表（午後1時30分～4時）

- (6) 多元構造音韻論と日本語 田端敏幸
- (7) 共通日本語の名詞文節のアクセント 今津藤一
- (8) 意味解釈の方法と創造性の類型 有馬道子
- (9) 合成人称語彙の構造 竹内慶子
- (10) Paul Kiparsky の Hermann Paul 批判について 平川信弘

閉 会 の 辞

受贈図書リスト（昭和57年6月1日～昭和57年9月30日）

宇部短期大学学術報告 第18号

（宇部短期大学 1982）

英語学体系 12 英語学と英語教育

（大修館書店 1982）

- 映像音響資料目録 (国立民族学博物館情報管理施設 1982)
- カナノヒカリ ダイ 718-721 ゴウ (カナモジカイ 1982)
- 計量国語学 第13巻 第5-6号 (計量国語学会 1982)
- 研究紀要 第3巻 第1号 (鹿児島女子大学 1982)
- 研究報告集 — 3 — (国立国語研究所 1982)
- 言語学論叢 第1号 (筑波大学一般・応用言語学研究室 1982)
- 言語文化研究 VIII (大阪大学言語文化部 1982)
- 考古学雑誌 第67巻 第4号, 第68巻 第1号 (日本考古学会 1982)
- 語学研究 第30号 (拓殖大学語学研究所 1982)
- 国語学 第129集—130集 〈共に2冊〉 (国語学会 1982)
- 国語学 研究と資料 第6号 (国語学 研究と資料の会 1982)
- 国語国文 第18号 (立正大学国語国文学会 1982)
- 国立民族学博物館研究報告 第6巻 第4号, 第7巻 第1号
(国立民族学博物館 1981-82)
- 西藏仏教宗義研究 第3巻 (東洋文庫 1982)
- 史苑 第42巻 第1-2号 (立教大学史学会 1982)
- 宗教研究 第55巻 第4輯, 第56巻 第1輯 (日本宗教学会 1982)
- 人文科学科紀要 第74輯 (東京大学教養部 1982)
- 人類学雑誌 第90巻 第3号 (日本人類学会 1982)
- スタイン蒐集チベット語文献解題目録 第6分冊 (東洋文庫 1982)
- 専修語学ラボラトリー論集 第10号 (専修大学LL研究室 1981)
- 続・都市化と敬語 (東京大学敬語研究会 1982)
- 調査報告集 3 (国立民族学博物館情報管理施設 1982)
- 朝鮮学報 第百一輯—百二輯 (朝鮮学会 1981-82)
- 通信 第44号 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1982)
- 東京外国語大学論集 第32号 (東京外国語大学 1982)
- 東方学 第64輯 (東方学会 1982)
- 東洋学報 第63巻 第3・4号 (東洋文庫 1982)
- 独仏文学 第4号 (山口大学独仏文学研究会 1982)

- 名古屋学院大学外国語教育紀要 No. 6
 (名古屋学院大学外国語教育研究センター 1982)
- 日本学士院紀要 第37巻 第3号, 第38巻 第1号 (日本学士院 1982)
- 日本学術会議月報 第23巻 第4—7号
 (日本学術会議広報委員会 1982)
- 日本常民文化紀要 第8輯 (I) (2冊)
 (成城大学大学院文学研究科 1982)
- 日本民俗学 第140号—141号 (日本民俗学会 1982)
- 文学研究 第79輯 (九州大学文学部 1982)
- 方言談話資料 (6) (国立国語研究所 1982)
- 放送文化 1982年 6月号—10月号 (日本放送出版協会 1982)
- みんぱく 1982年 6月号—9月号 (民族学振興会 1982)
- 山口女子大学研究報告 第1部 人文・社会科学 第7号, 第2部
 自然科学 第7号 (山口女子大学 1981)
- 要覧 1982 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1982)
- 論集 第29号 (神戸大学教養部 1982)
- Acta Asiatica* 43 (東方学会 1982)
- alsed* No. 25-26 (UNESCO 1982)
- Annual Newsletter of the Scandinavian Institute of Asian Studies*
 No. 15 (2冊) (The Scandinavian Institute of Asian Studies 1981)
- Nguyen Hoai Nhan *Chinese Writing? Chinese Vocabulary?*
 Vol. II (Nguyen Hoai Nhan 1982)
- Exlibris* (Une Division d'Europériodiques, s. a. 1982)
- Forum for Modern Language Studies* Vol. XVII No. 1
 (Scottish Academic Press 1981)
- Learning Laboratory System Guide* (専修大学 1982)
- Linguistique et Littérature* 3-4 (Académie Bulgare Des Sciences 1981)
- Literature Music Fine Arts* Vol. XV No. 1
 (German Studies Section III 1982)
- Marsori (Phonetics)* No. 3 (The Phonetic Society of Korea 1981)

Naše Reč 1-2

(Academia Nakladatelství Československé Akademie věd 1981-82)

Philologia 14

(三重大学外国語研究会 1982)

Вестник Ленинградского Университета 8, 14 (Ленинград 1982)

Русская Литература 2 (Академия Наук СССР 1982)

Русский Язык в Школе 3 (Москва 1982)

Українська Мова и Литература в Школи 5-8

(Київ Радянська Школа 1982)

- ◎ (日本学術会議会長 久保亮五氏より当学会会長あてに、下記報告掲載の依頼(昭和57年10月27日付)がありましたので、ここに掲載いたします。)

改革要綱を可決、新執行部選出

—— 日本学術会議第86回総会報告 ——

緊迫した雰囲気のもとで、第86回総会は、10月20、21、22日の3日間にわたり開催された。第12期開始とともに発足した日本学術会議改革委員会は、精力的な活動を続けてきた。前総会で改革試案が採択されるや、直に会員、有権者、学会・協会、学識経験者などの討議に付され、それらをまとめた改革要綱案が、今総会に提出された。活発な審議に基づく若干の修正ののち、独立して職務を果たす国の機関としての現学術会議の基本的性格を保持し、その役割の一層の発展を目指す改革要綱案は圧倒的多数の賛成のもとに要望・声明などとともに可決された。

その直後、伏見会長、岡倉・塚田両副会長は、採択された要綱をもって政府との交渉に入るにあたって、これまでの経緯を拭い、執行部の陣容を一新して当たることが必要であるとの判断を示し、辞意を表明した。会員は事態の厳しさを改めて認識するとともにその辞任を諒承し、決意を新たにして直ちに新執行部を選出、久保亮五(第4部)会長、安藤良雄(第3部)、八十島義之助(第5部)両副会長が決定された。

なお改革要綱案策定と並んで、学術会議が本来、日本の学術の進展のために常

時果たすべき多くの仕事が各種委員会の活動として続けられており、それらは口頭もしくは文書報告として173件に及んで紹介された。

会長挨拶及び諸報告（第1日）

学術会議関係物故者に黙とうを捧げたのち、伏見会長は挨拶の中で、学術会議をめぐる状況にふれるとともに、改革の遂行、さらには日本の学術の振興のための一層の奮起を会員に要請した。諸報告にうつり、まず岡倉副会長から、会長の諮問組織として設置された「日本学術会議改革問題懇談会」（座長、永井道雄氏）の答申が報告され、この答申の内容は今回審議される改革要綱案に十分盛り込まれているとの判断が示された。続いて、1983年度我が国で開催される国際会議、特定研究領域決定の経緯、科学技術振興のための機構試案、教科書検定問題への見解（学問・思想の自由委員会見解）表明などを含む各種委員会の報告紹介がなされた。

改革要綱案審議（第2・3日）

審議に先立って、伏見会長は提案採択後に予測される事態を説明し、総理府において進められている学術会議の改革検討に、どの程度本会議の理念が取り入れられるか懸念を述べた。そして重大な事態が起こった場合には、臨時総会を開いて学術会議としての意志を固めねばならないこと、また今期総会において改革要綱策定への会員の結束した努力を再び要請した。

つづいて要綱案各項目毎の逐次審議に入り、

I、「改革の基本的前提」として、(1)独特な性格の国の機関であること、(2)政府から独立して職務を行う国の機関であること、(3)日本の科学者の内外に対する代表機関であること、(4)公選制を基盤とする重層構造制を備えていること、(5)組織・運営上総合性を有していること。(6)実質上、科学者の自主的組織として機能していることなど6点の内容

II、「改革の重点」として、職務の明確化、会員のあり方、会員選挙は直接選挙を原則とするが定数のおよそ半については、推薦制（コオプション制を加味す

る)を導入,任期3年通算4選禁止,部制・専門別制,内部諸機関の組織運営,研究連絡委員会,国際交流,予算・事務局,科学者との結びつきの強化,他の学術関係機関等との関係など10項目にわたる内容について審議採択した。

さらに要綱採択に付随して,要綱の基本的方向の尊重と細目についての連絡・協議を求めるための政府に対する要望「日本学術会議の改革について」,科学者,学会・協会をはじめ,政府,国会などの一層の理解と協力を求める声明「日本学術会議改革要綱の決定にさいして」,及び,今後外部との対応を含む諸措置及び実施方について,運営審議会に授権するための申し合せ「日本学術会議改革要綱の実現をめざす諸措置について」を採択した。

なお,現行法の枠内で直ちに実施可能な,科学者・研究者と一層の緊密化を図るための内規「学協会との連絡のための登録について」の一部改正を承認した。

新会長の決意表明

久保新会長は就任に当たって,「会員や全国の科学者の支援で,将来の日本のために,憂いのないよう,学術会議を改革するため,精一杯尽したい。」と述べ,会員,科学者の協力を要請した。(日本学術会議広報委員会)

- ◎ (日本学術会議中央選挙管理会委員長から,下記のとおり依頼(昭和57年11月30日付)がありましたのでお知らせいたします。)

記

日本学術会議第13期(昭和58年)の選挙に有権者となることを希望される方は,日本学術会議中央選挙管理会(〒106 東京都港区六本木7丁目22番地34号)へ登録カード用紙を請求して下さい。

正 誤 表 (『言語研究』82号分)

158 ページ 14 行目	t	→	to
159 ページ 3 行目	(?)	→	(*)
180 ページ 11 行目	大阪松蔭女子大学	→	大阪樟蔭女子大学

◇ 本誌は文部省昭和57年度科学研究費補助金の交付を得て
刊行されたものである。